

捕鯨問題に どう向き合うか

捕鯨問題から見える日本の課題



映画監督
八木景子

やぎ・けいこ——昭和42年東京都生まれ。ハリウッド大手映画会社の日本支社勤務。退職後、「八木フィルム」を設立。捕鯨問題を取り扱ったドキュメンタリー映画『ビハインド・ザ・コーヴ 〜捕鯨問題の謎に迫る〜』を製作。初監督作品ながら世界八大映画祭の一つである「モントリオール世界映画祭」に正式出品されるなど、国内外で大きな反響を呼んでいる。

日本の捕鯨文化を批判する 映画がアカデミー賞に

二〇一〇年三月、第八十二回アカデミー賞の授賞式でドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』が「長編ドキュメンタリー賞」を受賞しました。

『ザ・コーヴ』は和歌山県太地町の伝統的なイルカ漁を主に取り上げ、日本の捕鯨文化を批判した映画です。しかしこの映画では、反捕鯨団体の活動家が町内の立ち入り禁止区域に侵入して隠し撮りをするなどの強引な取材や恣意的な編集が物議を醸し、日本国内では「事実と異なる」として、地元の方の反発や上映中止を求める抗議活動が巻き起こりました。

映画の公開後、太地町には以前より多くの、また、様々な環境団体の活動家が押し寄せるようになり、穏やかな田舎町とは程遠いものとなってしまいました。

もともとハリウッド大手映画会社の日本支社に勤めていた私が、退職後、フリーの立場で『ザ・コーヴ』への反証映画『ビハインド・ザ・コーヴ』の製作に取り組み始めたの

は、二〇一四年のことです。きっかけは、オーストラリアから日本の調査捕鯨が商業捕鯨の隠れ蓑だと訴えられたことに対し、二〇一四年三月に国際司法裁判所から出された判決が「まさかの敗訴」と報道されたのを知ったためでした。

この判決に「どうしてだろう?」と関心を持ち、捕鯨問題に長年携わってきた元IWC（国際捕鯨委員会）代表代理の小松正之氏の著書『日本の鯨食文化』を読み、IWCの実態と国際会議が機能していないという驚くべき状況を初めて知ったのでした。

もともとIWCは、アメリカの主導で「鯨類の保存を図り捕鯨産業の秩序ある発展を可能にする」ことを目的として一九四六年に設立された国際機関です。しかし、いつしかアメリカやオーストラリアなどを中心に、日本やノルウェーなどの捕鯨国に捕鯨を止めさせる方向の場となっていきました。

OPEC（石油輸出機構）など産油国で形成される国際会議と違い、IWCは七〇年代にアメリカ政府の政策によって捕鯨をしない小さな諸島までが多く参入しは

じめ、会議では科学的証拠となる議論が無視され、多数決の票数をもとに商業捕鯨の中止へとコントロールされているのです。さらには、七二年にアメリカ国内で施行された「海洋哺乳類保護法」を境に、イルカ・鯨を扱ったプロパガンダ映像も同国で数多く産出されていきました。

私財を投じて 反証映画を製作

その後、私は捕鯨問題の真実を追い、二〇一四年夏に太地町を訪れたのですが、まさかこの段階では自分が『ザ・コーヴ』に異を唱えるテーマの映画をつくるとは思っていませんでした。反捕鯨活動家が毎年イルカ漁解禁の九月一日から、和歌山県太地町に大挙して押し寄せているという、東京ではほとんど報道されることがなかった事実を私は現地で知りました。その光景を見て驚き、記録のつもりで手持ちのホームカメラで撮影を始めたのです。

たまたま現場に居合わせた私ですが、当時太地町に来ていた『ザ・コーヴ』の主演人物であるリック・オパバリにインタビューでき、数日

後には、監督のルイ・シホヨスも撮影できたことで、「この素材は世間に伝えなければ」という使命感が湧き起こりました。現状への憤りと撮影素材が先行して走り出した結果、貯蓄を切り崩して本格的に映画製作に取り組むことになったのです。これは意図せず太地町にいた私に起きた奇跡的なことで、毎年太地町を訪れているプロのカメラマンたちでもなかなか取材できなかつた部分だったと後に知らされました。

プロの方は大抵二泊三日などでスポット的に取材していくのがほとんどですが、私が現地に四か月もの間、長期滞在することになったのは、来日している多くの反捕鯨家たちや高齢化した元捕鯨師、町民の皆さんが心を開いた「素」を撮るために必要な時間だったからです。私はこの「素」を伝えれば真実が伝わる、と確信していました。

こうして濃厚な四か月の滞在後、東京での追加取材、編集を経て『ビハインド・ザ・コーヴ』が完成したのは二〇一五年七月でした。完成後、締め切り間近だった「モントリオール世界映画祭」に応募

すると、正式出品にしたいとの連絡を受け、このことが発端でワシントンポストやニューヨークタイムズ紙など、海外の大手メディア五十社以上で記事が取り上げられました。世界中の大手メディアが一同に報じたことには自分自身が一番驚きました。この作品は結論ありきで日本の捕鯨文化を批判する『ザ・コーヴ』の製作手法と違い、自分自身の捕鯨賛成・反対に関係なく、ただただ「なぜ」という疑問を追いました。

また、取材対象者の証言は「バランスよく五部五部に取材」を心掛け、双方の主要人物へインタビューし、淡々と事実を伝えていきます。その結果、観た方が反捕鯨家の矛盾点を多く感じ、「日本の主張を論理的に反証している映画」と評されることが多く、「反証映画」と呼ばれ世界に広がりました。

映画は二〇一六年一月から東京・新宿を皮切りに日本全国で公開されましたが、当初はシーシェパード創立者のポール・ワトソンからフェイスブック上で批難されたり、集団ハッカーのアノニマスによる攻撃などを受けてきました。しかし、ここで屈すると彼らの思う壺

と踏ん張り、クラウドファンディングの力を借りてニューヨークやロサンゼルス劇場でも公開を果たすことでアカデミー賞選考の土俵に上がり、当時『ザ・コーヴ』を選考した委員に観せることも実現できました。

さらに、二〇一七年六月には、Times社より英語版、Netflix社からフランス語やスペイン語など二十二言語に翻訳されたものが映像配信され、現在は世界中へと拡散しています。

価値観の押しつけに どう理解を求めていくか

反捕鯨団体の活動家たちが日本を批判する際に持ち出す論点は、主に次の三点があると思います。

一つ目は、イルカや鯨は知能が高く、海難事故に遭った人間を救うこともあるのだから、商業捕鯨や鯨食は反人道的だということ。反捕鯨活動家にとって彼らは家族であり、また神聖な生き物だと捉えているのです。しかし、特定の種だけを保護するのは自然界のバランスを崩すことに繋がっていきます。この事実を彼らに理解してもらい必要があります。

ストレス・脳(心)の健康対策へ…ヘッドホンのように、頭部に当てるだけ!

~穏やかな電気信号による、心地よい頭部への刺激~
どなたでも実感『1週間 お試し体験(レンタル)受付中!』

小型で
とても簡単!

“ブレイン・パワー・トレーナー”

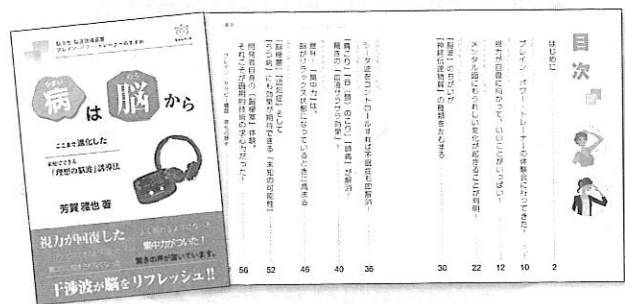
「ブレイン・パワー・トレーナー」が書籍となりました!

今なら、お試しの“レンタル(1週間)”をお申し込みの方全員に、

書籍 **病は脳から** ここまで進化した
やまいの 家庭でできる「理想の脳波」誘導法

をプレゼントさせていただきます。

レンタルご利用特典! 書籍プレゼントキャンペーン:平成30年1月末日まで



航空自衛隊に採用後、
全省庁統一資格をも取得、
国家機関で認められた実力

- 平成5年 視力向上・ストレス軽減が認められ、航空自衛隊に正式採用(その後、海上・陸上自衛隊にも採用)
- 平成6年 長嶋巨人軍の秘密兵器(メンタルトレーニング)として日本へ貢献
- 平成16年 海上自衛隊の推薦により、「全省庁統一資格」を取得

「脳ケア」(物忘れ、血流促進、目の衰え)対策は、
ご自身で、ご自宅で、簡単に、一日15分で!

簡単! 脳トレーニング(脳活性)の始め方は3つ!

1 ご購入 / 2 お試しレンタル / 3 当社体験ルームへのご来場

全て下記、フリーダイヤルまでお気軽にご連絡ください。

安心の30日間 新感覚・頭(ヘッド)マッサージ
全額返金保証 穏やかな振動でリラックスへ!

ブレイン・
パワー・
トレーナー



299,900円(税込)

- サイズ:縦92×横125×高さ20mm/●重さ:約128g(電極含む)
- 定格入力:100V~240V 50/60Hz
- 電極アダプター:DC9V 500mA
- 出力周波数:138Hz/141Hz/143Hz/145Hz/147Hz/151Hz
- タイマー:15、20、30分
- 使用電池:リチウムイオン電池/●充電時間:約8時間
- 内容:本体1台、ヘッド部(大・小各1)、ACアダプター1個、
カバー、コットン見本、取扱説明書

株式会社ACC
ブレイン・セラピー

0120-151-644 FAX03-6459-0682

〒105-0011 東京都港区芝公園1-2-17 芝公園シティハイツ8F Mail:info@acc-brain.jp HP:http://www.acc-brain.jp

二つ目は、すべての鯨が絶滅の危機に瀕しているという誤った情報からくるものです。確かに、かつて欧米による商業捕鯨が鯨の乱獲を招き、シロナガス鯨など一部の大型鯨が絶滅の危機に瀕しました。しかし、ミンク鯨に関しては、現在では自然界のバランスを崩すほど増え過ぎていると言われています。この資源数の多いミンク鯨を日本が獲ることにすら反対されているのです。この種ごとの資源数についても情報を発信し理解を求めていく必要があります。

そして三つ目は、日本は豊かな国であり、食料はいくらでもあるのだから、わざわざ鯨まで食べる必要はないし、鯨を食べたいと思っている日本人もそこまで多くない、というものです。

しかし、これも日本人が以前より鯨を食べなくなったのは、食べたくないからではなく、そもそもIWCの「商業捕鯨モラトリアム」などにより、鯨肉の流通量が大きく減ったからなのです。

また、鯨を食べる習慣は、戦後の食糧難の時代だけのものだと思います。思っている日本人も多いようですが、日本と鯨の繋がりは縄文時代から続いているもので、『古事記』の中でも神武天皇が鯨について詠っています。

そして、鯨は単なる食材の一つに留まらず、縁起物としても扱われていました。鯨という文字は、魚偏に右は大きいものを意味する「京」の文字。子供が大きく育ちますように、商売が繁盛しますようにとの先人たちの願いが込められているのです。

こういった食材や縁起ものとしての他にも、鯨や骨、油などを無駄なく使い、煙草入れや髪留め、三味線の撥、提灯、肥料など、生活の様々な場面で活用してきたのです。このように、私たち日本人は鯨と多様な繋がりをもち、ともに歩んできた民族であることが分かります。

気になる鯨肉の栄養面においては、水銀は南氷洋から獲れるものにはほとんどなく、あっても自然浄化されます。そして他の動物よりも高タンパク、低コレステロール、多くのスタミナ源を含んでおり、生活習慣病や鬱病を防ぐ効果があることが分かっています。まさに現代の日本人に必要とされている成分がぎっしり詰まっている

のです。

食糧自給率が四割を切っている現在においては、鯨が示す多くの事柄が日本に起きている様々な問題への一つの解を持つているように思われます。

プロパガンダ報道を見抜き 発信力を高める

国際的な問題において大事なものは、「あうんの呼吸」が通用しない国際社会に向け、日本の立場をしっかりと伝えるべく情報発信力を高めていくことです。島国である日本は言葉の壁、ロケーションの壁があり、そして考え方や精神性においても他の国々と大きな違いがあります。その違いから世界の声を聞けず、とりあえず静かにしてやりすごしておこう、などという心もしがちです。

また、今回、映画を通して感じたのは「よくつくってくれた」という日本人からの言葉や、実際に映画をご覧になった海外の多くの方も捕鯨に理解を示した方が圧倒的だということでした。海外の方はたとえ自分の考えとは違っても、相手の意見を聞くことを求めています。まずはこちらの考え

を伝え、そこから物事が動き出したり、クリアになっていくことの方が多くないように思います。

実際、私が製作した映画が世界配信されると同時に、シーシェパード創業者であるポール・ワトソンの妨害活動を一時停止し、また、太地町へのメンバー派遣も止めると宣言しました。二〇一五年に海外の大手メディアが一斉に『ビハインド・ザ・コーヴ』のことを報じた際には、五分のダイジェスト版に十五万人がアクセスし、反捕鯨キャンペーンのボランティアが集まらなくなったとシーシェパードのリーダーから連絡がきました。これは、太地町に行くことと逆振りがされる、とボランティアが警戒したのと、情報を発信したことによって反捕鯨活動家たちへの寄付がじわじわと減っていることが影響しているのだらうと思います。

今回の捕鯨問題もそうですが、メディアから流れる情報をそのまま鵜呑みにせず、受け取る側が「この報道は公平か、実際には何が起きているのか?」と想像力を膨らませることが重要だと考えています。

「使いこなせるだろうか?」
「自分に効果があるだろうか?」とご不安な方は、
「レンタル」から始められることを
お勧め致します。

7日間ごゆっくり、ご自宅で使用されてから、ご購入をお決めください。レンタルの際でも、わかりやすい写真と図式の操作手順書がありますので、ほとんどの方が到着してすぐ、簡単にご使用になれます。
★お電話でもサポート致しますので、ご安心ください。

レンタル料金(7日間 体験機器をお貸し致します。)
通常価格9,800円を「致知読者」ご優待価格の**4,800円(税込)**
(レンタル後にご購入の場合は、レンタル料金は[全額]返金致します。)

レンタルお申込みや、ご購入、ご相談は、下記フリーダイヤルまでご連絡ください。
~ご購入後の使用方法・ご相談も…安心のサポート・コールセンター完備~